

令和元年度第1回安城市総合教育会議録【要約】

日 時 令和元年6月20日(木) 午後2時から午後3時
場 所 教育センター2階 会議室
出席者 市長 神谷 学
教育委員会 杉山 春記 教育長
加藤 滋伸 教育長職務代理者
船尾 恭代 委員
近藤 倉生 委員
伊奈 希 委員

出席した職員 永田博充 企画部長
杉浦章介 行革・政策監
早川智光 教育振興部長
近藤芳永 生涯学習部長
横山真澄 企画情報課長
神谷 徹 総務課長
上原就久 学校教育課長
太田芳樹 企画情報課課長補佐
島田雅仁 総務課課長補佐
澤田敦至 総務課課長補佐
足立雅之 学校教育課課長補佐
杉浦邦彦 企画情報課企画政策係長
山田紗織 企画情報課企画政策係主事

傍聴者 なし
開 会 午後2時
日 程

第1 開会

第2 市民憲章の唱和
(市民憲章 唱和)

第3 あいさつ(要旨)

神谷市長：

本日の議題は不登校対策についてである。この後、担当から報告があるが、本市の不登校児童生徒の割合は残念ながら全国平均と比較して高い状況にあり、本市の大きな課題の一つとなっている。状況報告の後、皆様方の御意見

を拝聴したいと思う。

杉山教育長：

5月下旬、川崎市でスクールバスを待つ通学途中の小学生とその保護者が切りつけられるという大変むごい事件があった。安全であるはずのスクールバスでの事件ということで驚きを隠せない。また、その後も子どもたちに関わる事件事故が数多く報道されており、大変心痛める日々である。

本日は本市の教育の大きな課題の一つである不登校の問題を取り上げていただく。その現状を把握していただくとともに、今後、より良い施策に繋げていけたらと願っている。

第4 議題

議題（1）不登校対策について
学校教育課長説明する。

伊奈委員：自分の周りのお母さん方に不登校対策について意見を聞いてみたが、以前お子さんが不登校だった方は、「子どもが原因を人のせいにしての間は立ち直れていなかった」「自分自身も子どもを甘やかしすぎてしまったが、そのことを責めすぎてもいけなかった」という方がいた。「学校の先生と一緒に何人かの生徒が不登校の生徒に声掛けして、登校できるようになった方を知っている」という方もいた。

あとは不登校の原因が、「たまたま遅刻だったから休んだら、もう、次の日からはなんとなく行けなくなってしまった」、「親御さんが共働きで不在だから、家に帰っても誰もおらず居心地良く子どもが家庭で過ごせてしまう。」変わった理由では、「学校の建物自体が嫌で、中学校には入れないけれども校外学習なら行ける。」「学校のトイレとかを乾式にして欲しい。」という声も聞かれ、いろんな理由がある。学校に行きたくない日というのは、ほとんどの子どもがあるはず。それを親が一度許してしまったら子どもが甘えてしまう。それをどう食い止めるかというのを話し合ったが、学校で嬉しいことや夢中になることがあると、学校が楽しくなる。学校が楽しいって何だろうと話すと、最近は熱中症が心配されるので、10時のおやつの時間みたいなので熱中症対策のものを何か配るとか、それだけでも子どもは喜ぶ。

家庭での対策としては、国語の読み聞かせの宿題に道德の本も読み聞かせもしていただいて、親御さんの意識をもう少し変えていけないか。

あとは、学校の対策で何か変わって欲しいことがあるかを聞いたところ、少し現実離れしているが、「生徒が先生の授業を選べるシステム」「ロボット

が各クラスにいて顔認識をしてくれてお喋りをしてくれる。」という意見もあった。

先生が足りないというのは重々承知で発言するが、中学校に副担任があるのに何で小学校には副担任がないのかと思う。名古屋市のようにスクールカウンセラーに各校に常駐していただき、そうするとスクールアシスタントもその方にどのように動いたらいいか相談できるので、アシスタント自体ももっと有効活用できるのではないか。

最後に、「不登校になることがあっても一時のことだったりするので、人と関わらないひきこもりにだけはしないようにしたい。」とお母さん方と意見がまとまった。

船尾委員：一つは中学校であっても1学級の生徒数はもう少し少ない方が先生との関わりは大きくなる気がする。手とか目をかけてほしい子が多い。スクールカウンセラーの問題も担任ではない立場で子どもたちの心のケアをしてくれる人というのは、たぶんドイツなど外国の学校だと割と普通に行われているのではないかと思うが、日本はその部分が遅れているのではないか。

学校でうれしいこととか夢中になれることを見つけて欲しいし、授業の中でそういうのがあるともっといい。学校に対する信頼感とか、行ってみたい、行かなくちゃって思える気持ちをもっともつつくり出せていけると良い。

近藤委員：安城市の不登校の子どもたちが多いという統計的な問題が行政的にはひとつある。安城市は人口が発展的であるため、外国の方や特別支援学級の児童生徒の数が増えていたりするので、全国平均と比較する際に、地域の特殊性も少し考慮しないとイケないのではないか。不登校の数が本当に安城市に多いのかと言われると、補正値を掛けないとイケないと思う。

不登校の原因は先生も分析しているが、人間生きてく中でいろいろなことがある。コンプレックスで何か出来ないことがあるということ認識出来る子どもたちが不登校に陥りやすいのではないか。学校以外の居場所が社会にあることをきちんと教えてあげて、学校教育を進めていくのがいいのではないか。いろいろな原因で一定の人数の不登校の子は発生するので、学校に行かずふれあい学級を利用していいし、他の制度でもいいが、強く生きられる子どもたちを社会で見てあげられるという制度が良いのではないか。

加藤職務代理者：相対的にも絶対的に不登校の子どもたちが多いということで、今回はこのテーマが選ばれていると思うが、学校教育課長に質問してよろしいか。不登校になる理由はいろいろあると思うが、なぜ相対的に高いのか思い当たる理由は何かあるか。

学校教育課長：高いといっても多少かと思う。本市には外国籍児童生徒の不登校もいるので、先ほどの数値をやや押し上げているということはあると思う。

加藤職務代理者：なぜ質問したかという、このような数値が出てくると、数値をすごく気にしてしまう。原因は多岐に渡っているし、一人一人の原因が違っている。だから、対応の仕方も一人一人違ってくる。人間社会の中では、どの社会でもうまく馴染めない子たちは出てくる。基本的には学校に出てこれなくなっている子たちに一人一人に学校や社会が君たちのことをいつも見ているよ、関わっているよ、という姿勢をいろいろな施策の中で、あるいは対応の中で示していくことしかないと思う。また、率はあまり気にしない方が良いと思っている。

安城市の中でいろんな対応をしていただいているが、私も実際にこの2年間いろんな対応を見させていただいているが、かなり細かいことをやっている。だから、それを充実させながら、子どもたちへの関わりというか、発信を諦めずに丁寧に行っていくことしか、実は対応策はないのではと思う。

説明の中で気になったのは、教育センターの1階でふれあい学級をやっているとのことで、明祥中学校のお子さんがあるバスだと2時間かかるということだが乗り継いでくるのか。

学校教育課長：確実に知っているわけではないが、更生病院で乗り換えながら来ていると思う。

加藤職務代理者：教育センターの1ヶ所だけでふれあい学級をやっているが、明祥学区の方の子とか東山学区の方の子は、公共交通機関を使ってだと不便で大変なのではないか。こちらには小学校の子も来ているのか。

学校教育課長：昨年度、ふれあい学級には小学生が12名通っていた。

加藤職務代理者：可能かどうかはわからないが、南部のどこかに1ヶ所ぐらい、北部にも1ヶ所ぐらい、ふれあい学級のようなものができれば子どもたちは通いやすいのではないか。ふれあい学級には退職された校長先生方以外にどんな方が手伝っているのか。

学校教育課長：ふれあい学級の運営や子どもたちへの支援は退職校長の社会教育指導員が2名専属で対応している。

加藤職務代理者：1名だと、何かあったときに対応しにくいのかもかもしれないが、南部や北部にも1ヶ所ずつできれば通いやすいし、もう少し細かな指導もできるのではないかと思った。

私も高校で担任をしていたころ不登校の子がいて、学年でトップになったことが無い子がとにかく頑張ったら学年でトップになり、これからトップを維持できるか不安になってしまい、それから休み始めてしまった。原因は学習の不振だけではない。一人一人に対する対応の仕方が一概にこういう風にやれば良いという特効薬はないという認識のもとに行っていくべきだろう。まずは学校を楽しくして行けるようにしたい。学校だけじゃなくて自分で居

場所というか生きがいを見つけていけるようなそういった場を作ってあげることも大事だと思う。

杉山教育長：不登校問題については、冒頭に申し上げたように本当に大きな問題であり悩ましい課題である。冒頭に学校教育課長が不登校の数を300人と言ったが、ちょうどこの数は高棚小学校1校分ぐらい。そして、予備軍という言葉で1,000人という数字が挙げられたが、1,000人というのは桜井小学校が900人で、桜井小学校をしのぐ数の子どもたちが大変心配であると。数値はあまり気にしなくてもいいというお話もあったが、やはり数値については重く重く受け止めていかなければいけない。

いろいろ学校でもやるべきことは最大限努力してやってきてくれているし、また教育委員会のほうもやるべきことは一生懸命やらせていただく。でも、増え続けているという、このジレンマが本当に悩ましいところであり、不登校に陥らないための方策と同時に不登校に陥ってしまった子への対策、両方で考えていかなければならない。後者の不登校になってしまった子たちは結局、30日以上学校に来られていないということであり、伊奈委員が言われたように、ひきこもりまでになってしまうことが一番怖い。

誰かと繋がっていて欲しい、学校でなくてもいいので誰かと繋がっていてくれないと、その子どもたちの将来が本当に心配だと強く感じている。

その点で先ほど加藤職務代理者がふれあい学級の数と位置の問題を話題にしていたが、仮に北と南の方面にもふれあい学級があれば、その繋がっている可能性がもっと増えていくのかなと、誰かと繋がっていてほしいとの願いが少しは現実化するのかなということを思いながらご意見を拝聴させていただいた。

神谷市長：委員の皆さまと教育長からいろいろとお話をいただいた。結論はすぐには出ないかと思うが、またいろいろと参考にして新たな取組等を進めていただきたいと思う。

私の思ったことが2つある。不登校の状況は個々で千差万別であることは分かったが、どこかでモデル的な取組をされてはどうかと思った。例えば、スクールカウンセラーはもっともっと手厚くということだが、いきなり全市的に手厚くすることは出来ないので、例えば比較的不登校の多い南中でカウンセラーの滞在時間というのか接触していただく機会を増やしてみる。そこで、成功事例を大切にして、横に展開して他の中学校でもこういうことをやってみたら成果がでたよということを伝えていくという、いろんな取組をモデル的にどこかで集中的に一年間やってみてはどうかと思った。

それからもう一つ心配なのは、ひきこもりになってしまうといけないということ。学校に通えなかった子どもたちでも時期が来れば自動的に義務教育から

離れていってしまう。でも、青少年の家で何かやっていると思うので、「学校には君は相談に行けないかもしれないけれども、青少年の家で君の相談にのってくれる。」ということをきちんと伝えて、そういうところに行ってくれるような道をつけてあげると良いと思う。学校教育と生涯学習になり、個人情報等いろいろあるかもしれないが、そういう方たちに支えられて社会に出ていくことが出来る子になるかもしれないと思った。

非常に重いテーマだったので、皆さん結論などは出るものではないが、何とか新しい取組を通していい方向性を見いだしたいと思う。

議題（２）その他

神谷市長：

委員の皆さまにアンフォーレの状況を簡単に申し上げる。アンフォーレが6月でオープンして3年目を迎えた。アンフォーレ本館への入館実績だが、目標100万人としていたところ、118万人で目標を上回った。2年目は122万6千人ということで2年目の方が入館者が増えた。

公共施設も民間の商業施設も、1年目は珍しいから入館者が増えるが、2年目からは飽きられて足が向かなくなるというパターンが一般的だと思うが、アンフォーレは2年目の方が伸びた。図書館に入っていく方の人数は2年目の方がやや落ちたが、貸出数については、やや増えており、非常に好調だと思っている。

第5 事務連絡

第6 閉会

閉 会 午後3時